

仁和寺院家跡(花園宮ノ上町遺跡)

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は昭和51年秋に設立され、本年で丁度25年を迎えることができました。

これまでこの四半世紀のあいだに平安京跡の遺跡を中心とする多くの発掘調査事業を進めてまいり、さらにその調査成果を報告し、調査の意義や内容の周知のための普及・啓発事業にも務め、幾多の業績を挙げております。

これらの事業を推進する上で、日頃、市民の皆様には多大なご理解とご協力を頂いており、厚く感謝する次第です。

さて、京都市右京区花園土堂町に所在する仁和寺院家跡（花園宮ノ上町遺跡）について、昨年秋に行われました確認調査のあとをうけて、当研究所がこの遺跡の発掘調査を担当することになり、本年2月調査に着手し、3ヶ月余をついやして5月に終了いたしております。

この調査におきましては、平安時代後期にさかのぼる仏堂の四周を廻る雨落溝や柱礎石の根石跡等を検出し、また平安、鎌倉時代の多種の遺物が出土しております。それらの検討ならびに考察に拠って、この遺跡は仁和寺院家跡の一つである浄光院本堂「東千手堂」跡に該当すると見なされ、仁和寺とその子院の歴史と遺構を明らかにする上で重要な資料を提示するものと考えられます。その調査の概要をここにご報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたならば、ご教示たまわりますようお願いいたします。

調査に際して多くのご協力・支援たまわりました関係者各位に対して、厚くお礼ならびに感謝を申し上げます。

平成13年12月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

1. 遺 跡 名 花園宮ノ上町遺跡
2. 調査所在地 京都市右京区花園土堂町10番地他
3. 委託者及び承諾者 京都市住宅供給公社 理事長 西 晴行
4. 調査期間 2001年2月13日～2001年5月21日
5. 調査面積 約1,600m²
6. 調査担当職員 本 弥八郎・上村和直・山本雅和・太田吉男
7. 本書使用地図 京都市都市計画局発行の地形図（1：2,500）「花園」を調整して使用した。
8. 本書使用方位・座標値 平面直角座標系VI（ただし単位を省略した）
9. 本書使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度（座標及び標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した）
10. 本書遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
11. 本書遺物番号 挿図・図版の土器類・土製品・瓦類・木製品の順に通し番号を付した。番号は、本文・挿図・写真図版に共通である。
12. 本書作成担当職員 上村和直・山本雅和・太田吉男
13. 本書執筆分担 山本雅和：1・3（1・2）・4（1～3）
上村和直：2・3（3）・4（4・5）・5

目 次

1. 調査経過	1
2. 遺跡の位置と環境	1
(1)位置と環境	1
(2)周辺の調査	3
3. 遺 構	4
(1)層 序	4
(2)遺構の概要	4
(3)検出遺構	6
4. 遺 物	12
(1)遺物の概要	12
(2)土器類	12
(3)土製品	13
(4)瓦 類	15
(5)木製品	15
5. まとめ	19
(1)遺跡について	19
(2)検出遺構について	19
(3)出土遺物について	20

挿 図 目 次

図1 調査地位置図 (1:5,000)	2
図2 調査前全景写真 (西から)	3
図3 調査状況写真	3
図4 調査地基本土層図 (1:20)	4
図5 調査区配置図 (1:800)	5
図6 1区遺構実測図 (1:200)	7
図7 1区建物1向拝実測図 (1:40)	8
図8 1区建物1雨落溝断面図 (1:40)	8
図9 1区溝449断面図 (1:40)	8
図10 3区溝443断面図 (1:40)	9
図11 3区遺構実測図 (1:200)	10

図12	3区井戸293実測図（1：20）	11
図13	出土土器類・土製品実測図（1：4）	13
図14	出土軒丸瓦拓本・実測図（1：4）	16
図15	出土軒平瓦拓本・実測図（1：4）	17
図16	出土木製品実測図（1：4、1：8）	18
図17	1区建物1推定復原図（1：200）	21
図18	建物1復原図	21

表 目 次

表1	遺構概要表	6
表2	遺物概要表	12

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区全景（南東から）
		2	1区建物1全景（東から）
図版2	遺構	1	1区建物1向拝（北西から）
		2	1区建物1雨落溝北東部（北西から）
		3	1区建物1雨落溝北西部（西から）
図版3	遺構	1	1区溝449（北から）
		2	1区建物1南側整地状況（北東から）
		3	2区溝270（北から）
図版4	遺構	1	3区全景（北から）
		2	3区溝443（北西から）
		3	3区井戸293（北から）
図版5	遺構	1	5区全景（西から）
		2	11区全景（北から）
		3	13区全景（北から）
		4	14区全景（南から）
図版6	遺物		1区溝449出土土器
図版7	遺物		出土軒瓦
図版8	遺物		出土木製品

仁和寺院家跡（花園宮ノ上町遺跡）

1. 調査経過

調査地は、京都市右京区花園土堂町に所在し、ここに京都市住宅供給公社が団地を造成する計画をたてた。この地は、花園宮ノ上町遺跡にあたっているため、まず試掘調査を行い、その結果によって発掘調査の要否を決定することとなった。

試掘調査 試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターによって、2000年10月25日～27日に、試掘トレンチを4ヶ所設定し、調査を行った。その結果、3ヶ所の試掘トレンチでは、現地表下1m以内の浅いところで多数の遺構が発見された。特に調査地北部の試掘トレンチでは、平安時代中期から後期の雨落溝が発見され、院家の御堂と推定された。この結果、調査地には平安時代の遺構が良好な状態で残っていることが推定できることから、発掘調査を指導することとなった。

発掘調査 発掘調査は財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当することとなり、2001年2月13日から開始した。調査区は既存の建物による攪乱を避けて調査地各所に設定した。特に試掘調査で雨落溝が検出された調査地北部では、建物の全体を明らかにするために大きく調査区を設定した。さらに、調査の進行と検出した遺構の状況に合わせて、調査中に2回の調査区の拡張・追加を行った。設定した調査区は最終的に14ヶ所である。各調査区では、重機掘削後、精査・記録を行い、必要に応じて最後に地山を断割り、堆積状況を調べた。また、建物1は現地で保存されることになったため、調査終了後土嚢と砂で埋め戻しを行い、5月21日に調査を終了した。

なお、調査中の2001年4月12日に報道発表を行い、4月14日には現地説明会(参加者330名)を開催した。また、近隣の御室小学校・花園小学校学童の見学授業を随時実施し、調査成果の公表に努めた。

2. 遺跡の位置と環境

(1)位置と環境(図1)

調査地は、住吉山(大内山)の南山麓に立地し、双ヶ丘の東側、五位山の北側に位置する。この地域は北側が中位・下位段丘、その南側が西ノ川によって形成された扇状地からなっている。全体の地形は、北東から南西へ緩やかに傾斜する地形を呈し、仁和寺南側と法金剛院南側では約30mの高低差があり、所々で大きな段差が見られる。また、当地域の広域立会調査によって、谷口円成寺町で大規模な川跡、仁和寺南側で南北流路などが検出され、平安時代に埋め立て・整地や流路の付け替えなどの大規模な造成工事が実施されたことが明らかとなっている¹⁾。

調査地の東側約100mには、西京極大路を隔てて平安京があり、周辺には平安時代中期から鎌倉時代にかけての、仁和寺に付属する院家が多数建立されたことが文献に記されている。調査地周

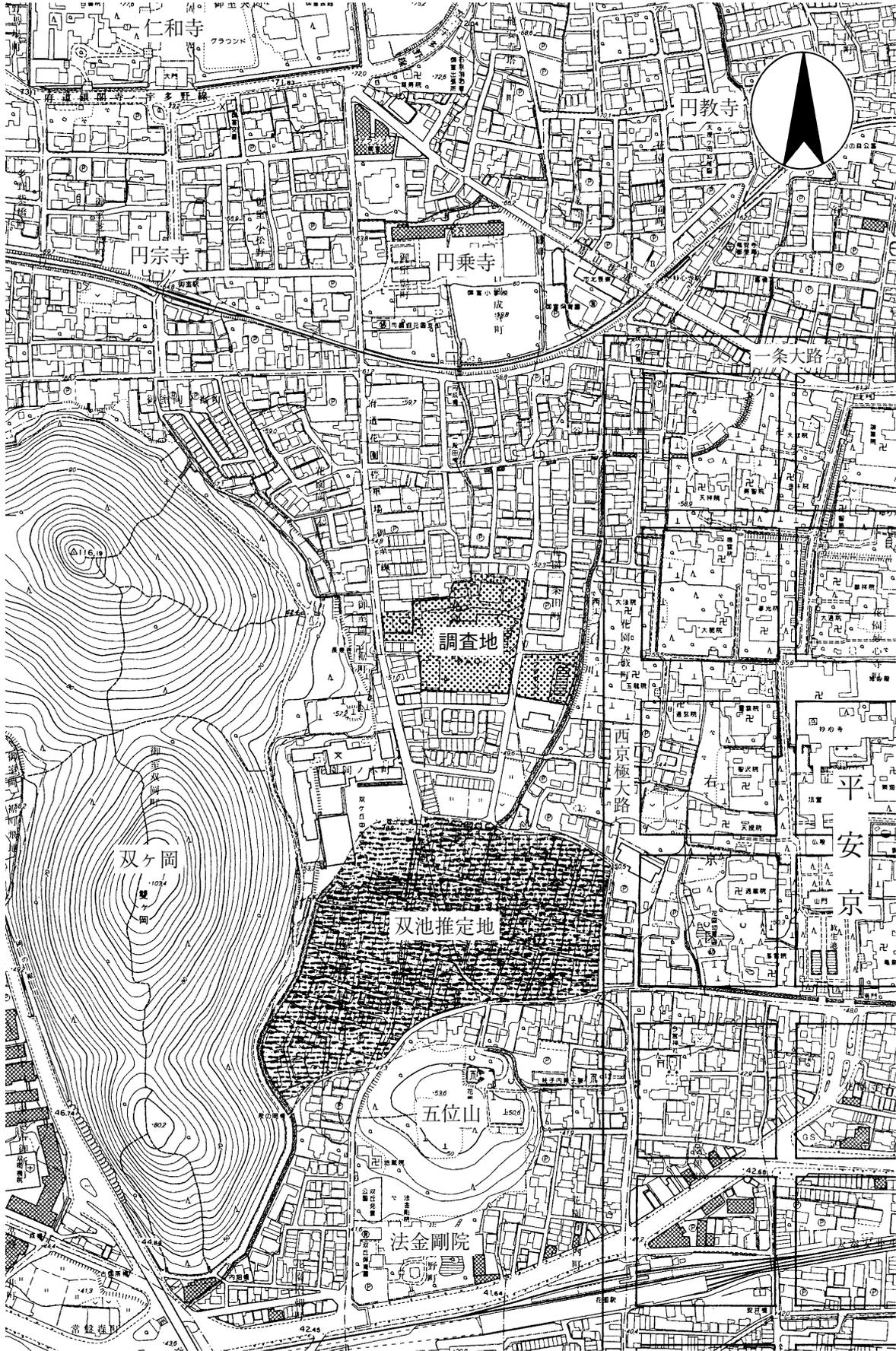


図1 調査地位置図 (1 : 5,000)

辺には、我覚寺(池上寺)・浄光院・宝塔院などの院家があったと推定されている。これらの院家は、中世には衰退・廃絶し、江戸時代には池上村の耕地となっていた。

池上村の地名は双池(雙池)にちなんだもので、池北側が「池上」池南側が「池尻」と呼ばれていた。『続日本後紀』承和十四年(847)十月二十日条には「双丘下有大池、池中水鳥成群」とあり、黒川道祐の『嵯峨野行程』には「双ノ岡ノ東南法金剛院トノ間ニ、大ナル岩石数多アリテ、水石ノ跡残レリ、是古ヘニ所謂双ノ池ノ跡ナリ」、『山州名跡誌』には「在第三丘東、今埋テ為田形尚顕也。同所北有民家其地曰池上」とあり、双ヶ岡東側山麓に双池が位置し、江戸時代には埋没していたものの、水田畦畔や露出した石から痕跡が明らかであったことがわかる。池の痕跡は、道路や敷地境界線や段差によって確認でき、現在の花園宮ノ上町・花園段ノ岡町のほぼ町域内が、大規模な園池(東西約250m、南北約200m)であったと推定できる。また、五位山北側の立会調査では平安時代中期から後期の池を検出しており、これを裏付けている²⁾。

(2) 周辺の調査

調査地周辺で行われた、これまでの主要な発掘調査・試掘立会調査の概要を述べる。

1968～70年には調査地南側の法金剛院で発掘調査が行われ、平安時代の寺域西限築地・西部の建物2棟と院内園池の汀線を検出した³⁾。1973年には調査地北側の円乗寺推定地で発掘調査が行われ、南北溝2条・南北築地を検出した⁴⁾。1974年には円教寺推定地で発掘調査が行われ南北溝を検出した。いずれも区画に関係した遺構で、条里に則ったものと推定された⁵⁾。

1980年代以降、双ヶ岡地域における網羅的な立会調査が始まり、多くの遺構・遺物が検出された。特に円乗寺・円宗寺・法金剛院推定地では溝・池・井戸等の遺構が検出され、寺域などの復原の基準となった。これらの成果をまとめて1997年に報告書が出版され、旧地形の復原を行うと共に、仁和寺や院家の寺域設定については、法金剛院は平安京条坊、他は条里や自然地形に規制されたとの指摘がなされた⁶⁾。1985年には調査地南西側の双ヶ丘中学校校内での発掘調査で、室町時代の大型甕を検出した⁷⁾。1987年には円乗寺推定地で、平安時代中期の南北築地両側溝を検出した⁸⁾。1995年以降、法金剛院内外で発掘調査が断続的に実施された。調査では平安時代後期の三重塔・東御所・中門廊、東限の築地・東門、西京極大路等が検出され、伽藍配置や西京極大路の状況が明らかとなった⁹⁾。



図2 調査前全景写真(西から)



図3 調査状況写真

3. 遺 構

(1) 層 序 (図4)

調査地の基本的な層序は、地表面から近代以降の盛土、耕作土、平安時代後期から鎌倉時代の整地層、無遺物層の地山の順である。

盛土は数cm～約0.6mの厚さで、調査地北部では極めて薄い。耕作土は約0.3～0.5mの厚さで、調査地南部の調査区のみで確認した。平安時代後期から鎌倉時代の整地層は1区・3区・11区の一部にしか残っていなかった。地山は黄褐色粘土または黒褐色砂泥である。大部分の遺構は地山直上で検出し、後世の削平が著しかったことが窺える。

遺構面の標高は、1区北端で51.6m、5区中央で49.6m、11区中央で50.2m、3区南端で50.3mで、全体の地形は北から南に緩やかに傾斜する。

(2) 遺構の概要

調査で検出した遺構は、1区218基、2区42基、3区157基、5区7基、7区2基、8区4基、9区11基、11区35基、13区2基、14区3基、総計481基である。なお、4区・6区・10区・12区については、削平を受けたため遺構は検出できなかった。

遺構の時期は、大きく室町時代以降と平安時代後期から鎌倉時代に分かれる。

室町時代以降の遺構には、小溝・柱穴がある。小溝は1区・3区・5区・11区で検出した。幅約0.1～0.6m・深さ数cm～約0.2mで、断面形は浅いU字形である。耕作に関する遺構と考えている。柱穴は散在し、まとまりがつかめていない。

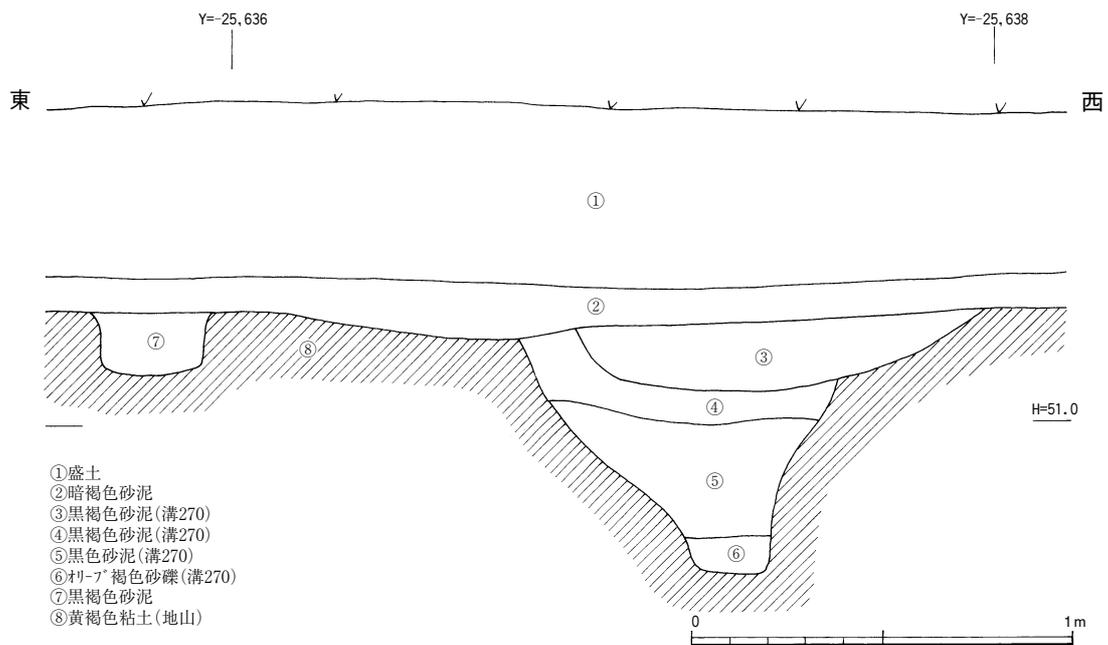


図4 調査地基本土層図(2区西部南壁、1:20)

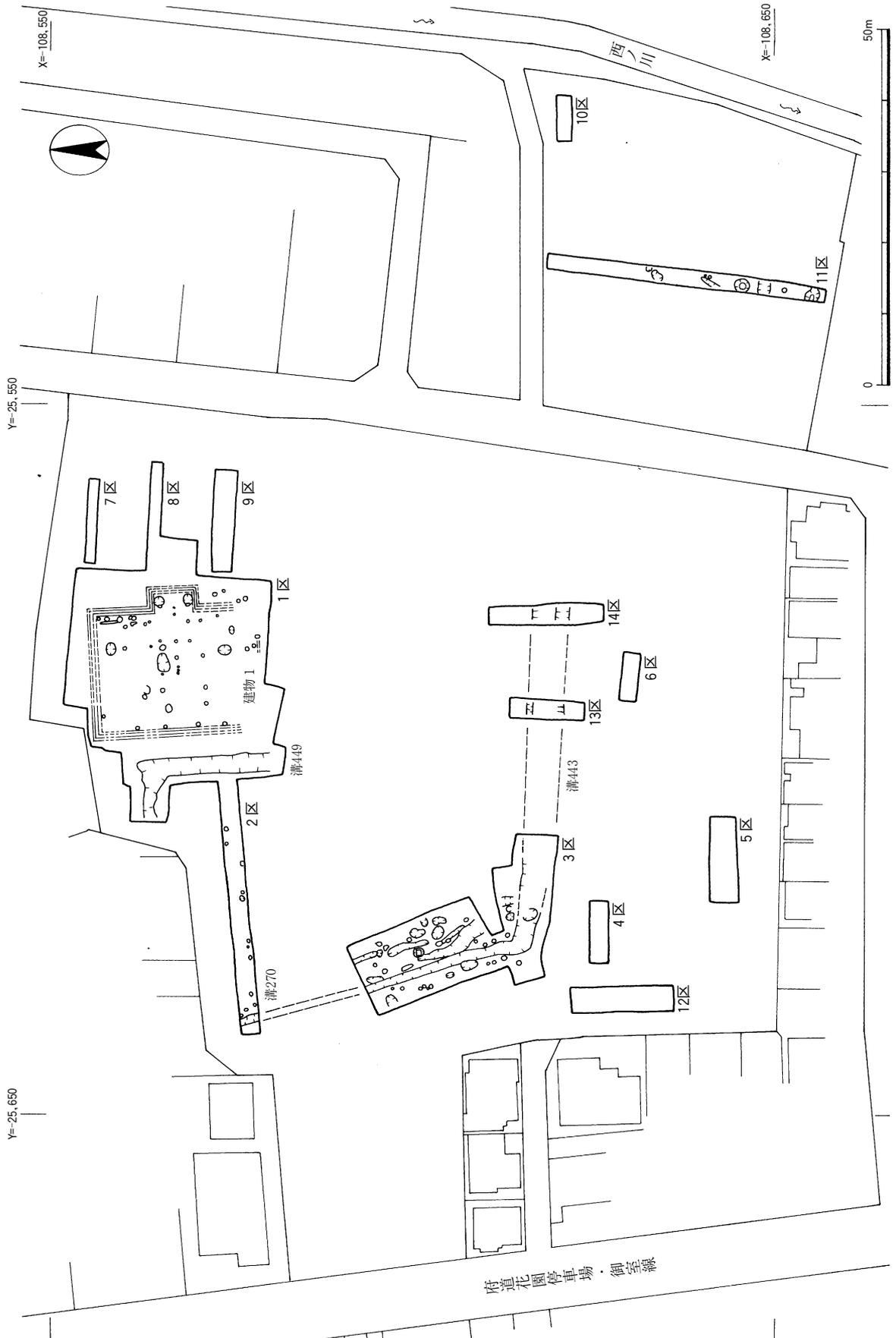


図5 調査区配置図 (1:800)

平安時代後期から鎌倉時代の遺構には、建物・溝・井戸・土壇・柱穴がある。1区・2区・3区北半・11区では柱穴・土壇を多数検出した。特に3区では柱穴を多く検出し、建物群が形成されていたと推定できるが、建物としてまとまりがつかめていない。柱穴の中には底部に石を据えるものもある。以下、主要な遺構を報告する。

なお、各遺構及び出土遺物の時期は、平安京・京都Ⅰ期～ⅩⅣ期編年案に準拠する¹⁰⁾。

(3) 検出遺構

建物1 (図6～8、図版1～3) 1区中央で検出した南北棟礎石建物である。上面は後世に削平を受け、礎石は皆無で、礎石据付跡の残存状況も悪い。

建物周囲には石組雨落溝が廻り、溝心々間距離は東西17.5m・南北22.7mである。雨落溝の東側中央は、7.6mの幅で3.1m東側に張り出す。雨落溝は幅約0.35m・深さ約0.1mで、両側に長さ約0.25m・幅約0.2mの比較的揃った河原石を平坦な面を上にして2列ずつ並べ、東側・南側では底に一辺0.2m程度の石を平坦な面を上にして1列敷く。また、石が抜き取られた穴が目立つが、石据え付けのための掘形はない。雨落溝底は、北側に比べ南側が約0.15m低く、東側に比べ西側が約0.7m低い。溝埋土は砂泥層で、平安時代後期から鎌倉時代の瓦類・土器類が少量出土した。

雨落溝に囲まれた内側はやや高まり亀腹状となる。北東部では石を0.8m等間隔に据えた南北溝を検出し、これが亀腹端に関係した施設と推定できる。最も高く残っている地点と雨落溝上面との差は約0.15mである。亀腹は地山を削り出して造る。

礎石据付跡は、建物中心部で1ヶ所、北辺で2ヶ所、東辺で1ヶ所、西辺で4ヶ所、南辺で1ヶ所、張り出し部で2ヶ所検出した。中央の礎石据付穴は、径0.8m・深さ0.1mの円形で、中に若干根石が残る。周辺部の礎石据付穴は、径約0.6m・深さ約0.2mの円形で、中に一辺0.15m程度の根石を詰める。張り出し内では南北2ヶ所で礎石抜き取り穴を検出した。径約1.4m・深さ約0.5mの楕円形で、底部で礎石据付穴と一辺0.2～0.5m程度の根石を検出した。根石は上部が抜き取られてはいるが、中央に平坦な石を据え、周りに斜方向に石を据える。また、向拝南北中央で一辺0.25mの石を平坦面を上にして据える。

表1 遺構概要表

時 期		遺 構				
		1区	2区	3区	11区	13・14区
平安時代後期から鎌倉時代	Ⅳ期		溝270	溝270・溝443		溝443
	Ⅴ期	建物1・溝449	柱穴	溝443・井戸239・土壇・柱穴	柱穴	溝443
	Ⅵ期	建物1・柱穴	柱穴	土壇・柱穴	井戸・柱穴	
室町時代以降		小溝・柱穴		小溝・柱穴	小溝・柱穴	

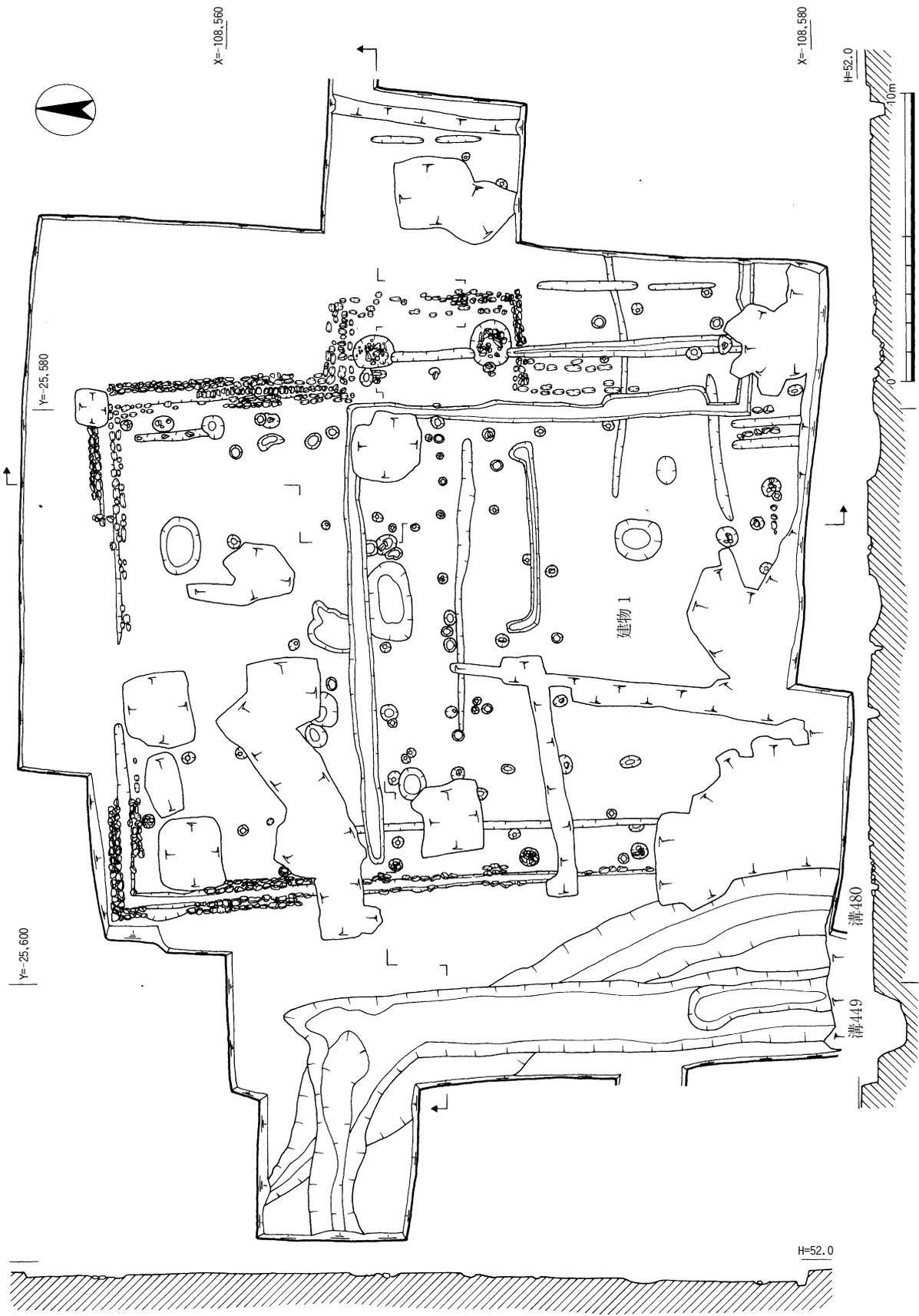


图6 1区遺構実測図 (1:200)

建物南側では、南側に約0.2mの厚さで土を積み整地を行っている。整地土上面では旧建物中央部で柱穴多数と、南西部で幅0.5mの石列2条を検出したが、どのような施設になるか不明である。柱穴は径約0.35m・深さ約0.2mで、底部に石を据えるものが多い。

溝270(図4・11、図版3・4) 2区・3区で検出した素掘り南北溝である。北側で西に振る方位をとり、3区南端で東西方向に屈曲して溝443となる。規模は2区・3区北部では幅約1.1m・深さ約0.8mであるが、南側は次第に広くなり、3区南端部では幅約1.8m・深さ約0.3mである。2区・3区北部では断面形は鋭いV字形で、水流の痕跡が著しく、底部に近い部分は部分的に壁面がえぐれている。3区南端部では断面形はU字形となり底部は平坦である。3区での溝底面の南北差は数cmであり、3区南部は上面が削平を受けたことが分かる。埋土は下層に砂・上層に粘土が堆積する。平安時代後期の土器類が出土した。なお、溝270の中心座標はX=-108,632.76、Y=-25,594.14で、南北中軸方位はN-16°29'05"-Wである。

溝443(図10、図版4・5) 3区・13区・14区で検出した素掘り東西溝である。3区で溝270と接続する。規模は3区では幅約4m・深さ約0.4mで、西側は次第に広くなり、13区では幅約6m・深さ約0.5m、14区では幅8m以上・深さ約0.5mである。断面形はU字形で底部は平坦であるが、底部に断面V字形の落込みが流れに沿って蛇行して見られ、水流の痕跡が認められる。溝底面は西側の3区に比べ東側の14区が約0.5m低い。埋土は下層に砂・上層に粘土が堆積する。平安時代後期の土器類が出土した。なお、溝443の中心座標はX=-108,618.54、Y=-25,593.70で、東西中軸方位はW-5°57'57"-Nである。

溝449(図9、図版3) 1区で検出した素掘り南北溝である。建物1の西側に接し建物方向にはほぼ一致し、北側で西へ屈曲する。南北方向部分の規模は、幅約2.3m・深さ約1mで、断面形は方形に近い逆台形で、底部はほぼ平坦で、底部の南北差は無い。壁面の一部には護岸の杭が残っていた。埋土は底部近くが砂層で、上に粘土が分厚く堆積する。平安時代後期の土器類が多量に出土し、木製品・木片が出土した。なお、中心座標はX=-108,567.70、Y=-25,602.00である。

また、東西方向部分の規模は、幅約1.8m・深さ約1.1mである。断面形は漏斗形で、底部で水流の痕跡を観察できた。底部の高さは南北方向部分より約0.2m低い。埋土は下層に砂・上層には粘土が堆積する。

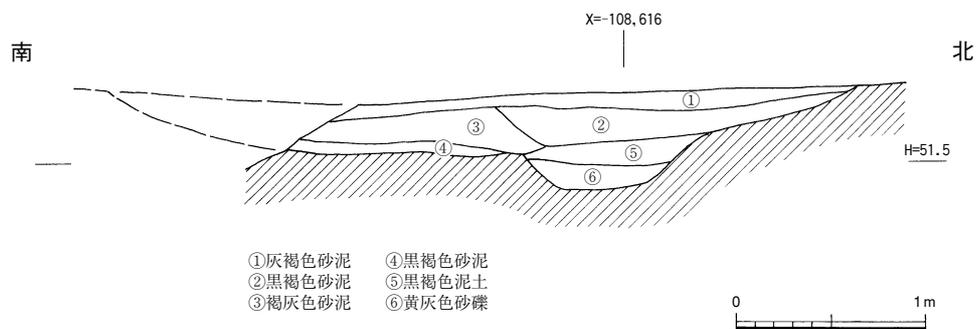


図10 3区溝443断面図 (Y=-25,618.70、1:40)

溝480(図6) 1区で検出した素掘り斜方向溝である。溝埋没後に建物1・溝449が造られる。規模は幅1m～2m・深さ約0.5mである。断面形はU字形で水流の痕跡が認められる。埋土は下層に砂・上層に粘土が堆積し、遺物は少ない。

井戸293(図12、図版4) 3区中央部で検出した方形縦板横棧組の井戸である。掘形は方形で、一辺1.3m、深さ1.7mである。井戸枠は、内法一辺0.82m、残存長は下端から1.25mである。縦板は各面3枚で、外側に2重又は3重に重ねて補強する。横棧木は3段残存し、両端に凹凸柄を作り、組み合わせる目違い柄組みである。4隅に角柱を入れる。縦板は内側のものが幅約0.2m・厚さ0.02～0.03mと揃っているが、外側の2重目・3重目のものは幅約0.2～0.3m・厚さ0.01～0.03mとやや不揃いである。下端に方形孔を穿つものが見られる。棧木は長さ約0.8m・幅0.8～

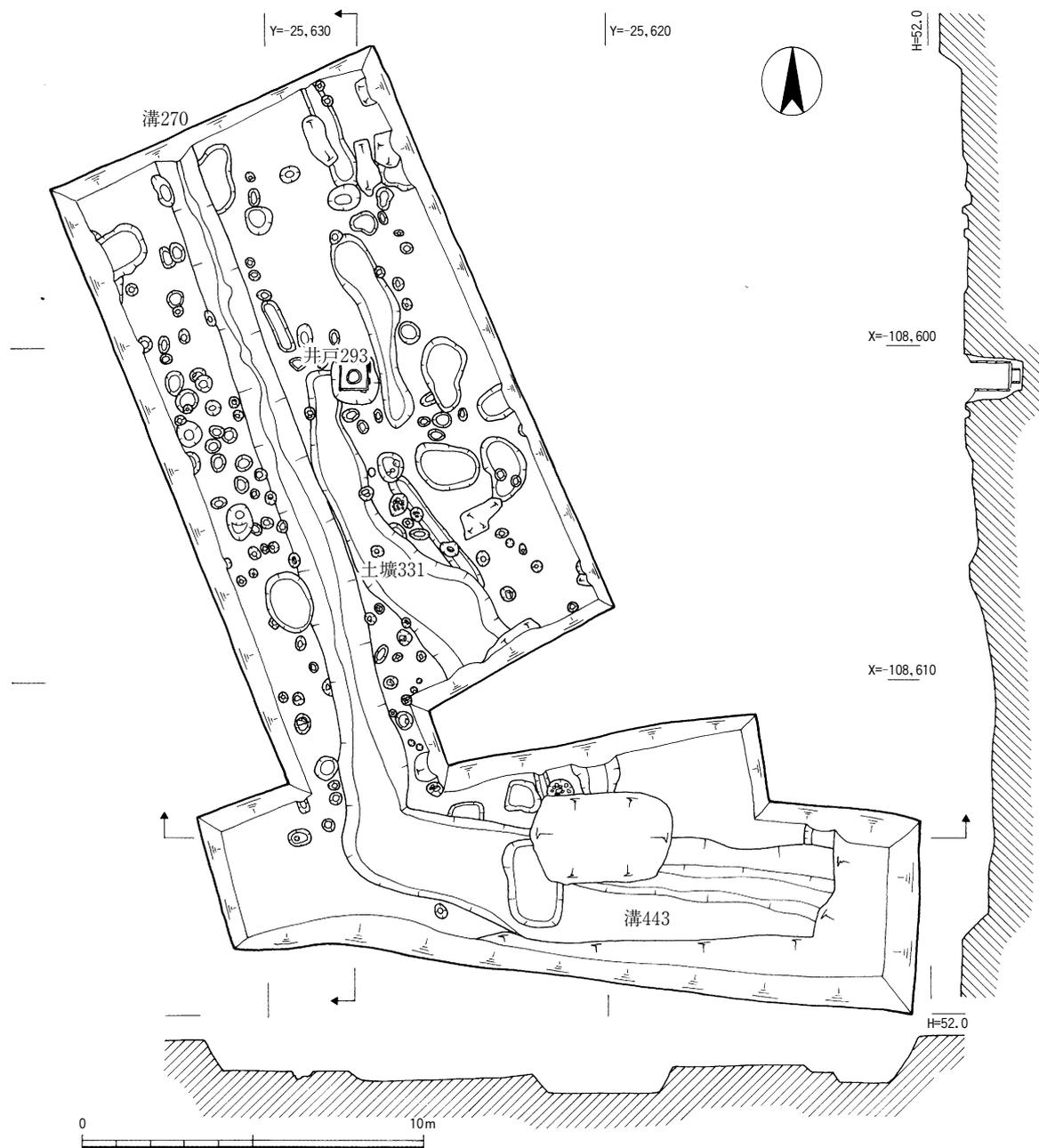


図11 3区遺構実測図(1:200)

0.9m・厚さ0.02mと揃っている。底部中心に径0.44m・高さ0.24mの曲物を据える。底部と曲物内に小石を敷く。井戸枠内埋土は、下層が砂礫、中層が粘土層、上層が砂泥層である。埋土の下層から土器類と木製車輪・箸などの木製品、上層から土器類が出土した。

土壌331(図11) 3区中央部で検出した土壌である。平面形は一辺0.35mの楕円形で、深さ0.15mである。中央に下に瓦器椀、上に土師器皿を口縁部を上にして重ねて据える。伴出遺物は確認できない。埋土は暗褐色砂泥である。

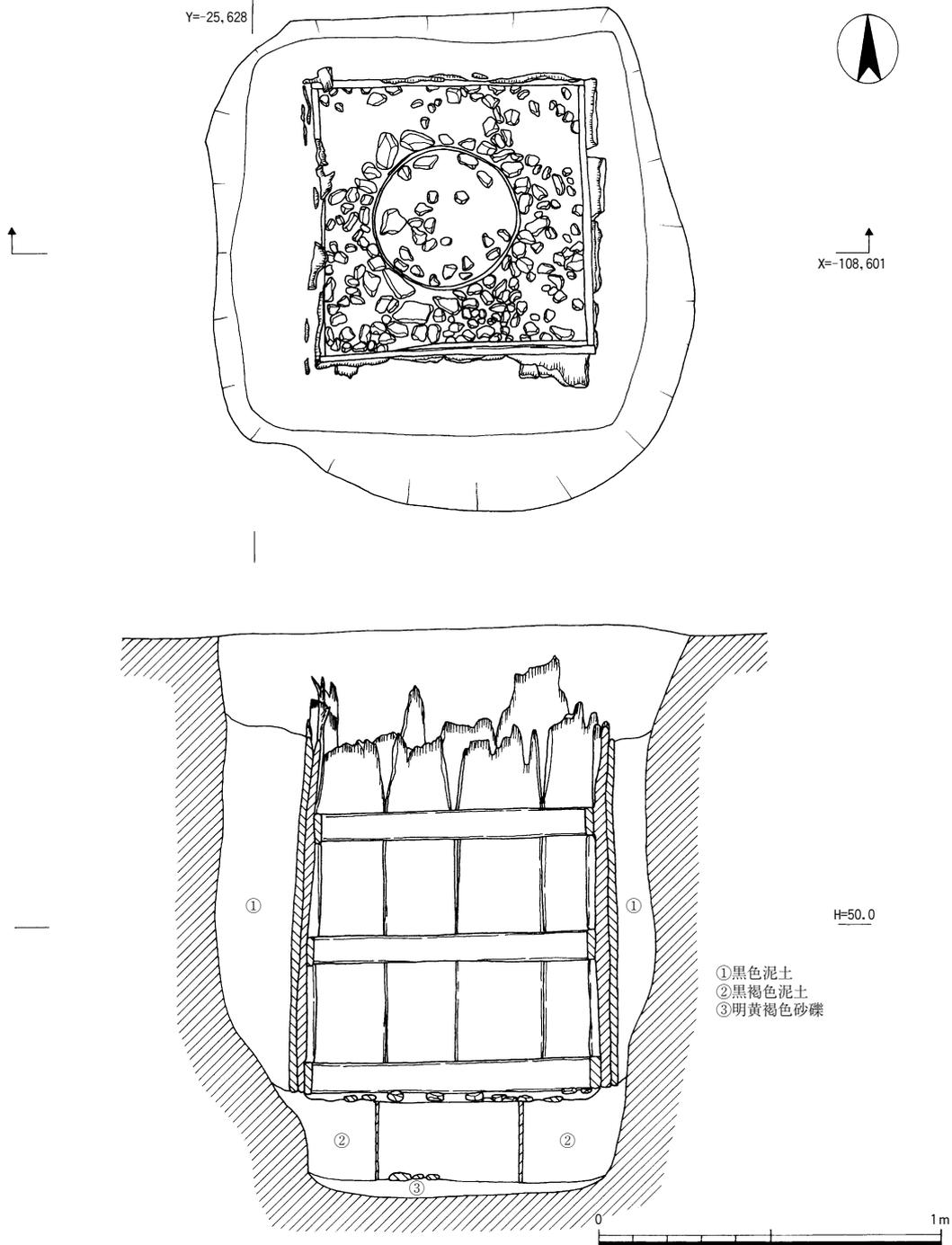


図12 3区井戸293実測図 (1:20)

4. 遺物

(1) 遺物の概要

出土した遺物には、土器類・瓦類・土製品・石製品・木製品などがある。その他、鉄滓・焼土・炭などが出土した。出土地は4区・6区・10区・12区を除き、全ての調査区から出土した。時期別には、平安時代後期から鎌倉時代の遺物が主体で、他の時代に属する遺物は微量である。

平安時代中期の遺物は主に溝270から出土した。土器類・瓦類があるが、いずれも細片で損傷が進んだ破片が多いので、混入したと考えている。平安時代後期から鎌倉時代の遺物は、各調査区から多量に出土し、特に溝449・溝270からまとまって出土した。土器類・瓦類が多くを占め、他に土製品・石製品・木製品などがある。室町時代以降の遺物は、主に耕作土や耕作に関係する小溝から出土した。土器類のみで、いずれも細片で全体の分かる個体はない。

(2) 土器類 (図13・図版6)

概要 土器類には、土師器・白色土器・瓦器・須恵器・焼締陶器・灰釉系陶器・中国製磁器などがある。溝270・溝443・溝449からは平安時代後期の土師器皿類がまとまって出土した。

溝270 (図13、1～13) 土師器皿・甕、白色土器盤・椀・高杯、瓦器椀、須恵器椀・鉢・甕、灰釉系陶器椀・壺、中国製白磁椀が出土した。混入品の緑釉陶器椀の破片も目立つ。土師器皿には口縁部が強く屈曲する小型皿 (1～7)、外反する小型皿 (8・9)・大型皿 (10・11) がある。いずれも底部外面はオサエの後、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデで仕上げる。土師器甕 (12) は口縁部が体部から屈曲し、端部に面をもつ。頸部・口縁部内外面はヨコナデで仕上げる。瓦器椀 (13) は体部が底部から内湾気味に開く。体部・口縁部内外面は密にミガキを施し、端部

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代中期	土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器	1箱	無し	1箱	無し
	軒平瓦・緑釉瓦	1箱	軒平瓦3点・緑釉瓦2点	無し	無し
平安時代後期から鎌倉時代	土師器・白色土器・黒色土器・瓦器・須恵器・焼締陶器・灰釉系陶器・中国製磁器	59箱	土師器57点・須恵器1点・灰釉系陶器1点・瓦器3点・中国製白磁2点	50箱	無し
	軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦・文字瓦	14箱	軒丸瓦30点・軒平瓦24点・文字瓦3点	無し	10箱
	土製硯・石製石鍋	1箱	硯1点	1箱	無し
	木製下駄・箸・ヘラ・部材・球・車輪・曲物・折敷・檜皮	2箱	下駄2点・箸30点・ヘラ2点・球1点・車輪2点・不明木製品5点	1箱	無し
	鉄滓・焼土・炭・モモ	1箱	無し	無し	1箱
室町時代以降	土師器・焼締陶器・施釉陶器・磁器	1箱	無し	無し	1箱
計		80箱	169点	53箱	12箱

内面に沈線がめぐる。Ⅳ期中段階に属する。

溝443 (図13、14～21) 土師器皿・鉢・甕、白色土器盤、瓦器椀・鉢・鍋釜類、須恵器椀・鉢・甕、焼締陶器甕、灰釉系陶器椀・鉢・壺、中国製白磁椀が出土した。土師器皿には口縁部が強く屈曲する小型皿 (14～16)、受皿形の小型皿、口縁部が外反する小型皿・大型皿 (21)、内湾する小型皿 (17～19)・大型皿 (20) がある。須恵器椀 (22)・灰釉系陶器椀 (23) は小型で体部が底部から内湾気味に開く。底部外面に糸切り痕が残り、他は内外面ともすべてヨコナデで仕上げる。23は口縁部内面にわずかに自然釉が付着する。口縁部が内湾する土師器皿が一定量含まれるので、時期幅をみてⅣ期中段階からⅤ期古段階に属すると考える。

溝449 (図13、22～42) 土師器皿・鉢・甕、白色土器盤・椀、瓦器椀・鉢・鍋釜類、須恵器椀・鉢・甕、灰釉系陶器椀、中国製白磁椀・白磁壺が出土した。土師器皿には口縁部が強く屈曲する小型皿 (24～26)、受皿形の小型皿 (34)、口縁部が外反する小型皿 (32・33)・大型皿 (38・39)、内湾する小型皿 (27～31)・大型皿 (35～37) がある。24～26は屈曲が弱くなる。また、小型皿・大型皿とも口縁部が内湾するものの割合が多い。瓦器椀 (40) は外面のミガキが粗くなる。中国製白磁椀 (41・42) は体部外面に回転ケズリを施し、底部外面を除く全面に施釉する。なお、底部外面に墨書がある須恵器椀が1点出土しているが、文字を判読することはできない。Ⅴ期古段階に属し、中でも古相を示す。

井戸293 (図13、43～53) 土師器皿・鉢、瓦器椀、須恵器鉢・甕、灰釉系陶器椀・壺、中国製白磁椀が出土した。土師器皿には受皿形の小型皿 (50)・口縁部が内湾する小型皿 (43～49)・大型皿 (51～53) がある。口縁部が屈曲・外反する皿は含まれていない。また、内湾する皿も全体的に小型化する。なお、掘形出土遺物 (43～45) と枠内出土遺物 (46～53) には顕著な時期差は看取できない。Ⅴ期新段階に属する。

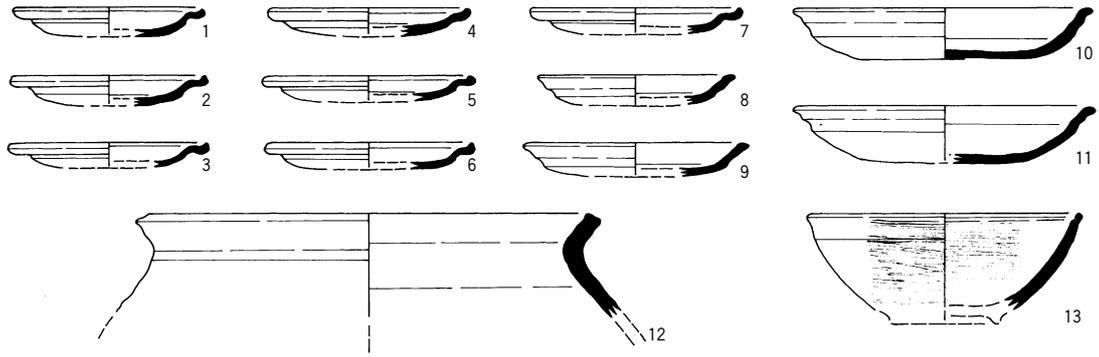
土壙331 (図13、54・55) 土師器大型皿と瓦器椀が重なって出土した。土師器大型皿 (54) は口縁部が底部から屈曲気味に高く立ち上がり、口縁端部はわずかに肥厚する。器壁は厚い。瓦器椀 (55) は口縁端部がわずかに外反し、内外面ともミガキが粗くなる。Ⅴ期に属すると考える。

建物1雨落溝 (図13、56～64) 土師器皿・甕、白色土器盤・高杯、瓦器椀・鍋釜類、須恵器鉢・甕、灰釉系陶器椀・鉢、中国製白磁椀・青磁椀が出土した。土師器皿には受皿形の小型皿・口縁部が内湾する小型皿 (56～61)・大型皿 (62～64) がある。小型皿は器高が低くなり、口縁部のヨコナデが1段階になるものが増加する (58～61)。龍泉窯系の青磁椀が含まれることも新しい要素である。小破片が多く、時期幅をみてⅤ期新段階からⅥ期中段階に属すると考える。

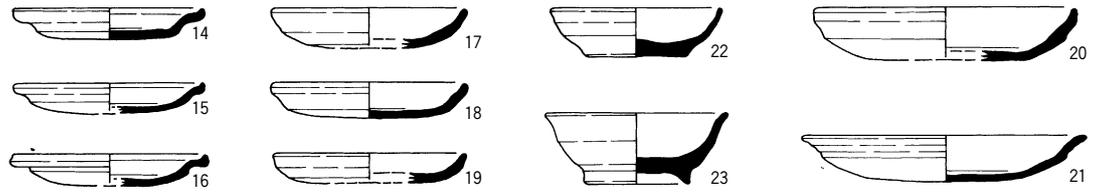
(3) 土製品 (図13)

硯 (図13、65) 風字硯先端部の破片が1点出土した。須恵質である。タタキで成形し、側面はケズリで形を整える。上面端部には細かい剥離面が連続する。また、上面は全面が使用により強く摩耗し、部分的に墨が付着する。3区の土壙から出土した。

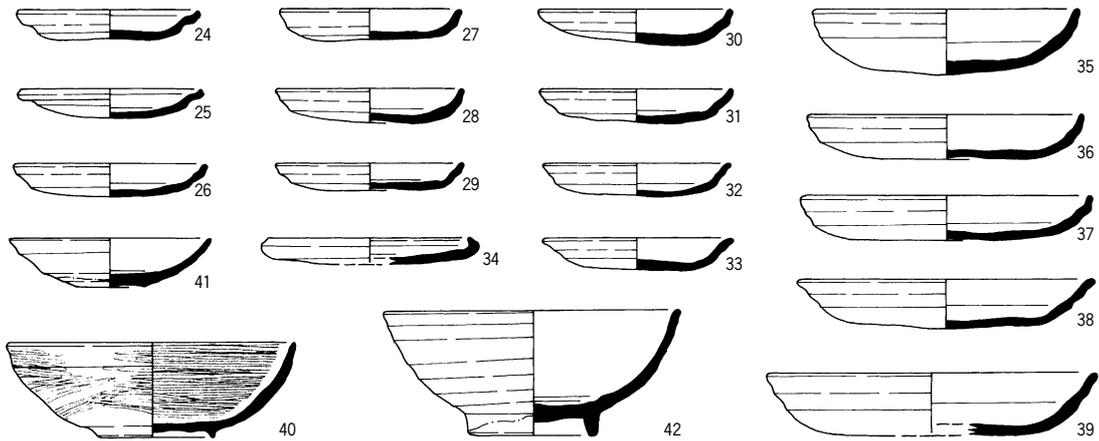
溝270



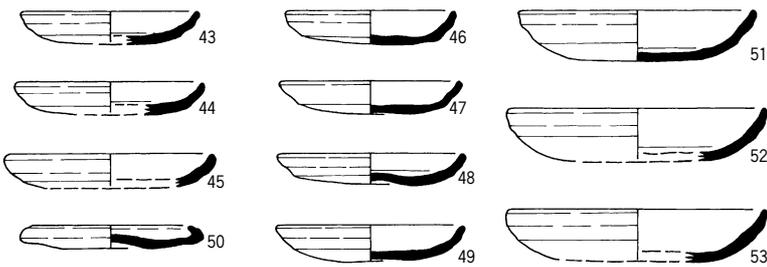
溝443



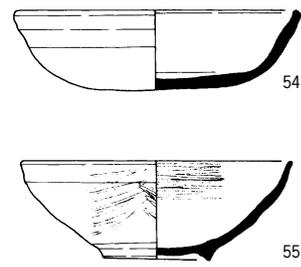
溝449



井戸293



土壙331



建物1 雨落溝

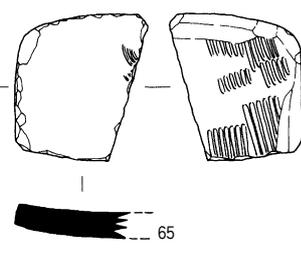
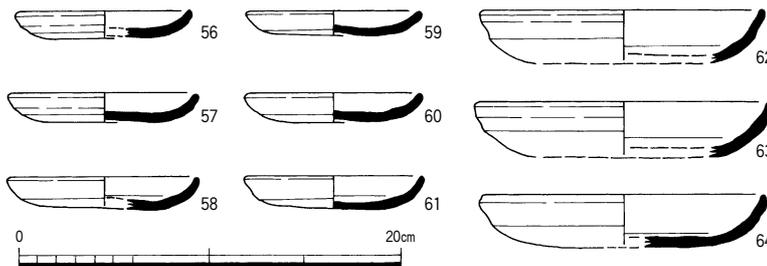


図13 出土土器類・土製品実測図（1：4）

(4)瓦 類 (図14・15、図版7)

概要 瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・文字瓦などがある。時期別には平安時代中期と、平安時代後期に大きく分かれる。その他の時代のものは皆無である。

平安時代中期(図15) 中期の瓦は軒平瓦3種3点で、軒丸瓦は見られない。出土遺構は溝449・3区遺構検出中・溝443である。産地は幡枝窯である。また、緑釉丸瓦が包含層から2点出土した。

78～80は対向C字中心飾り外行3転唐草紋で、各々支葉端部の巻き込みが異なる。同範例は仁和寺円堂院・幡枝窯にある。

平安時代後期(図14・15) 後期の瓦は軒丸瓦15種26点(型式不明4点)、軒平瓦12種20点(型式不明4点)及び丸瓦・平瓦がある。出土遺構は建物1東雨落溝(3点、69)・北雨落溝(2点、74・91)・西雨落溝(3点)・向拝部雨落溝(2点)・建物内南北溝149(1点、70)、柱穴58(1点、83)、土壇207(1点)、土壇208(5点、81・89)、土壇213(2点)、溝270(2点、75)、溝300(2点、85)、溝416(1点)、溝449(14点、68・71～73・76・86～88・90)、井戸474(1点)、1区検出中(2点、92)、1区包含層(8点、66・82・84)、3区検出中(1点、77)、8区検出中(1点)、9区検出中(2点、67)である。軒瓦の産地は、山城産(66～70・81～86)、播磨産(71・72・87・88)、丹波産(73～76・88～90)、大和産(77・92)である。

66は単弁8弁蓮華紋である。同範例は仁和寺・法金剛院にある。67は単弁12弁蓮華文で、同範瓦が3点出土。同範例は仁和寺円堂院・円宗寺・尊勝寺にある。68は単複交互弁蓮華紋で上・下6弁で、同範瓦が7点出土。同範例は仁和寺円堂院・尊勝寺・法金剛院にある。69は複弁8弁蓮華紋である。70は単弁8弁蓮華紋である。71は単弁13弁蓮華紋である。同範例は神出窯にある。72は単弁11弁蓮華紋である。同範例は円宗寺・尊勝寺・神出窯にある。73は単弁16弁蓮華紋である。同範例は王子窯にある。74～76は複弁蓮華紋で、74・75は8弁である。同範例は真言院・法成寺・王子窯にある。76は上・下4弁で、同範瓦が2点出土。同範例は真言院・尊勝寺にある。77は複弁8弁蓮華紋で、同範瓦が3点出土。同範例は円宗寺・真言院・興福寺・法隆寺にある。

81は外行唐草紋である。82は左偏行唐草紋である。83は内行唐草紋である。84は楕円形中心飾り3転外行唐草紋で、同範瓦が6点出土。同範例は仁和寺円堂院・法金剛院にある。85は右4転偏行唐草紋である。同範例は円宗寺・尊勝寺・幡枝窯にある。86は内行唐草紋である。同範例は仁和寺・尊勝寺にある。87・88は背向C字中心飾り外行唐草紋である。88の同範例は円宗寺・法勝寺にある。89～91は背向C字中心飾り3転外行唐草紋で、90は同範瓦が3点出土。90の同範例は円乗寺・法成寺・王子窯、91の同範例は尊勝寺にある。92は右偏行唐草紋である。同範例は薬師寺・法隆寺にある。

他に「天」銘文字瓦が2点ある。また、播磨産丸瓦凸面に軒丸瓦範型を押捺したものが1点ある。

(5)木製品 (図16、図版8)

概要 木製品には服飾具・食膳具・工具・運搬具・容器(曲物)・檜皮などがある。大半は、1区溝449(93・100～102)や3区井戸293(94～99・103～105)などから出土した。以下、主要なもの

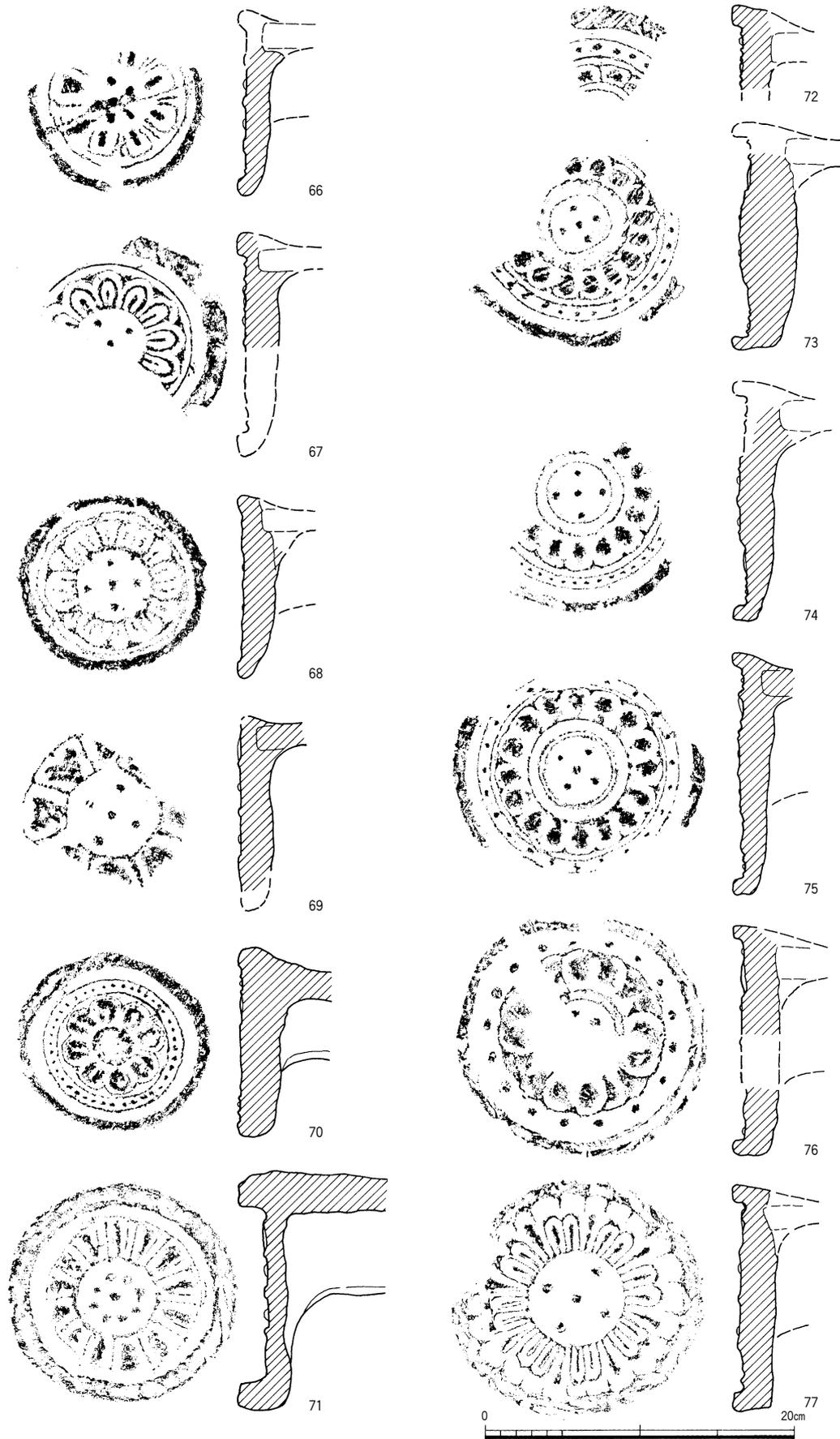


图14 出土軒瓦拓本·实测图(1:4)

を報告する。

下駄(93) 連歯下駄で、2点出土した。いずれも前壺を一方に寄せ、後壺は後歯の前にある。材質不明。

箸(94~99) 30点以上出土した。大半は両端を尖らすもので、片尖りのものもある。材質不明。

ヘラ(100・101) 2点出土した。板材・角材の一端を尖らせたものである。材質不明。

部材(102) 1点出土した。断面半円形の材の一端は尖り、他端は溝を付けて突起状にする。材質不明。

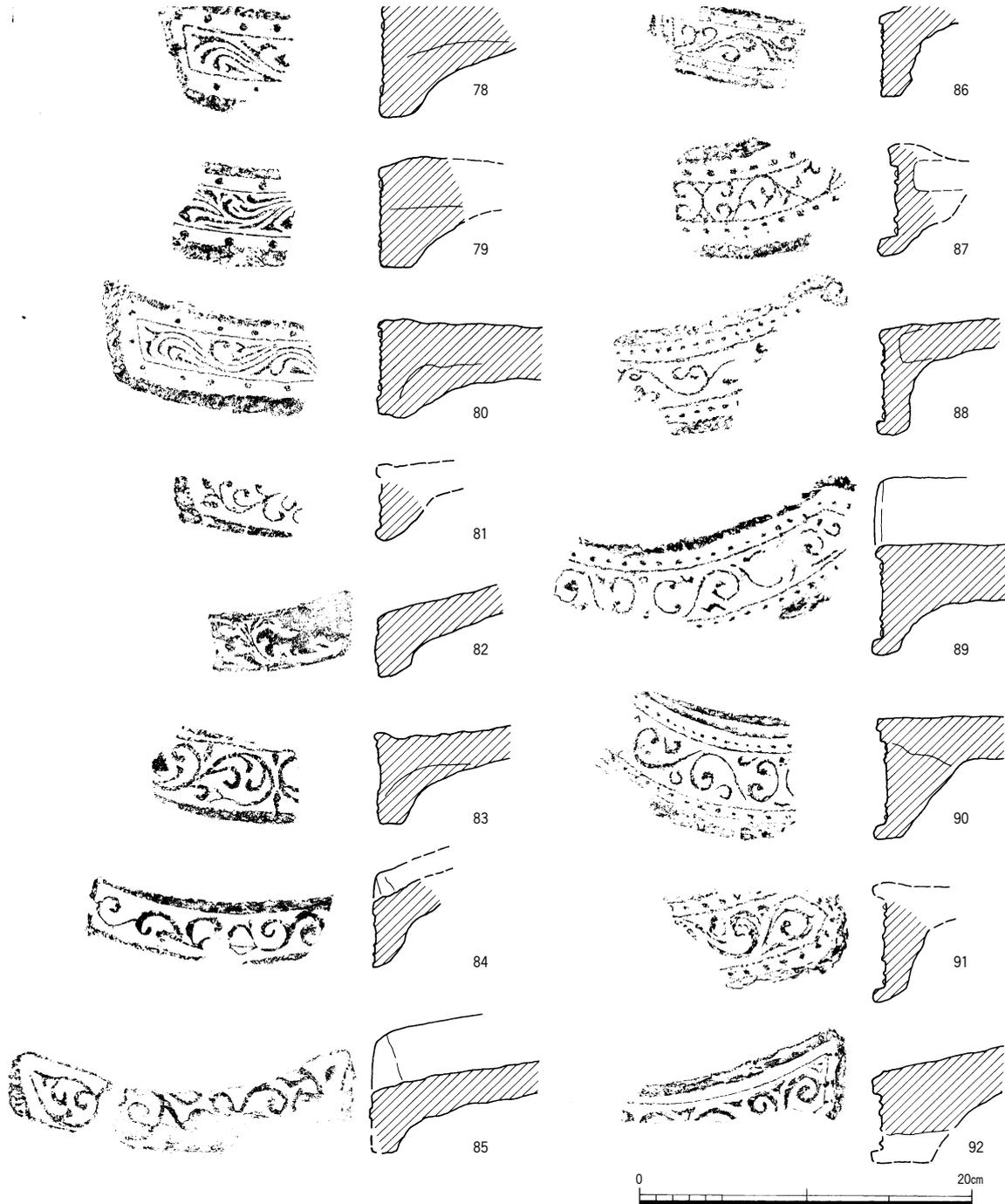


図15 出土軒平瓦拓本・実測図 (1 : 4)

球(103) 1点出土した。形状は扁平である。細かい削りで調整を行う。材質不明。

車輪(104・105) 組み合わせ車輪の輪木外輪(大輪)が2点出土し、別個体である。円弧状で中央内側に突起があり、両端は出柄・入柄である。中央1ヶ所と両側2ヶ所に輻を入れる穴を穿ち、中央は半分まで、両側は貫通する。105は側穴に輻の残欠と外側からの楔が残存する。突起部両側には内輪(小輪)を取付ける柄がある。柾目材で木表を外側に使い、全面削り成形する。材質は樫である。

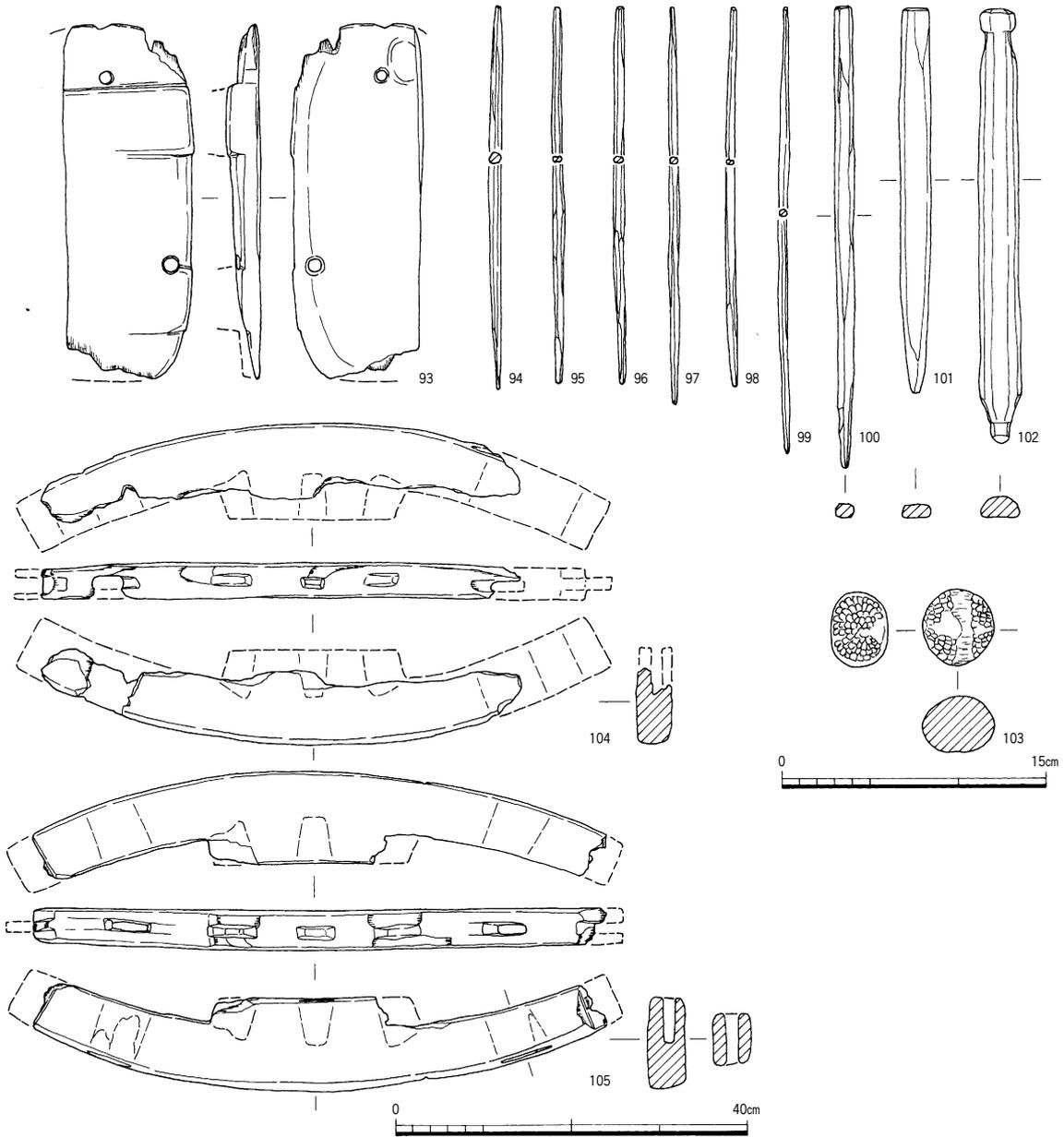


図16 出土木製品 (93~103は1 : 4、104・105は1 : 8)

5. まとめ

今回の調査では、平安時代後期の遺構を中心として多数の遺構を検出でき、良好な遺物が出土した。ここでは、周辺の調査成果を含めた検討を行って調査のまとめとしたい。

(1) 遺跡について

概要 平安時代中期以前については、少量の遺物が出土しているが明確な遺構は確認できず、詳細は明らかでない。調査地が活況を示すようになるのは、平安時代後期になってからである。

平安時代後期の遺構は、各調査区で多数検出された。3区を中心に検出した井戸・柱穴・土壇などは、出土遺物から建物1とほぼ同じ時期と考えられ、これに付属する雑舎などの施設と考えることも可能であろう。調査地周辺の立会調査でも当該期の遺構・遺物が広範囲に認められる。

室町時代になると、調査地には柱穴や耕作に関連する小溝が分布する程度となり、出土遺物量も急減する。おそらく建物1をはじめとする施設は、鎌倉時代のうちには廃絶したと考えられる。

院家について 仁和寺に付属する院家の沿革をまとめた『仁和寺諸院家記』や『仁和寺諸堂記』によると、調査地である双ヶ丘の東で双池の池上(北側)には、先に寛忠(池上大僧都、903～977)が「我覚寺(池上寺)」を建立し、その後、頼尊(池上律師、1025～1091)によって「浄光院」が建立されて、我覚寺が合併されたと推定されている¹¹⁾。各遺構の時期や、建物1の造営年代が出土遺物や建築様式から11世紀後半であることなどから総合すると、調査地で検出した遺構は浄光院に関わるものであったと推定でき、建物1は浄光院の本堂である「東千手堂(池上千手堂)」に当たると考えられる。

今回の調査では、仁和寺の院家で初めて建物の全容を明らかにできた。仁和寺の院家は未だ不明な点が多く、今回の調査成果は当地域の歴史を解明する重要な手掛かりとなったといえよう。

(2) 検出遺構について

建物1 (図17・18) 建物1は上面が削平を受けていたが、雨落溝や9ヶ所の礎石据付跡から全体を復原しておく。礎石据付跡のうち中央部の大型のものを身舎位置、周辺の小型のものを縁束位置とすると、身舎は桁行3間・梁間2間で、四面に庇・縁が付く南北棟となる。東面中央に向拝が取り付くことから、東向き建物であることが分かる。身舎の柱間寸法は、桁行中央間4.4m(15尺)・両脇間3.9m(13尺)、梁間は3.4m(12尺)の等間である。庇の出は2.7m(9尺)、縁の出は1.8m(6尺)となる。全体の規模は、桁行総長が17.6m(59尺)・梁間総長12.2m(40尺)である。向拝の出は縁から2.2m(7尺)である。軒の出は雨落溝の位置から、身舎部分で2.6m(9尺)、向拝で2m(7尺)となる。亀腹端は不明確であるが、北東部の施設から考え縁から0.5m内側と推定すると、ほぼ東西14.8m(50尺)・南北20.2m(67尺)となる。亀腹の高さも不明であるが、身舎と向拝の礎石据付穴が同規模とすると、雨落溝上面から0.5m程度と想定できる。雨落溝の形状・石の使い方は、嵯峨遍照寺、白河法勝寺・尊勝寺、鳥羽殿金剛心院などで検出されたものに類似して

いる。なお、建物中心座標はX = -108,567.70、Y = -25,588.00で、南北中軸方位はN - 2° 59' 33" - Wである。

溝 溝449は建物1の西雨落溝から約3.5m(12尺)離れて位置し、方向や出土遺物から建物1と関連していることは間違いない。両側の壁面がほぼ垂直で底部が平坦であることや、護岸を施すことから考え、人工的な溝と考えられる。埋土の状況から考え、池状の施設と推定できる。

溝270と溝443は3区南端部で接続し、埋土からみて一連の溝と考えられる。いずれもほぼ直線的に造られていることから、土地区画に関連した人口の溝と推定できる。溝270の方位は建物1と異なり、出土遺物もやや古い。3区の柱穴の中には溝270の埋没後に造られているものがあり、時期差があることを裏付けている。

溝443は建物1の方向とほぼそろう、出土遺物も同様な時期を示し、溝270が埋没した後も使用されていたと推定できる。

(3) 出土遺物について

瓦 類 平安時代中期の軒平瓦は量が少なく、同時期の土器類も極少量である。出土地は散在し、伴出土師器から考え後世の遺構に混入したと推定できる。同範又は同紋瓦が仁和寺本寺・仁和寺円堂院(904創建)所用瓦に見られることから、時期は10世紀前半と推定できる¹²⁾。これらの軒瓦は時期から考え、我覚寺所用瓦の可能性はある。ただ、当該期の遺構は調査地内及び周辺の立会調査では確認されていない。場所は特定できないものの、調査地付近に我覚寺に関連する建物を想定することが出来よう。

平安時代後期の瓦は全体的に量が少ないが、軒瓦54点の内大半が建物1周辺から出土した。内訳は雨落溝から10点、建物内遺構から2点、建物西側溝449から14点、建物東側土壇から8点、建物南側整地層から8点、1区検出中2点である。この状況は丸瓦・平瓦の出土傾向とも対応し、これらの瓦が建物1に使用されたと推定できる。ただ、量が少ないこと、平瓦に完形品が見られないこと、溝449から檜皮が出土したことから、建物は檜皮葺きで葺棟と推定できる。

軒瓦は、同範瓦もしくは同紋瓦が円宗寺(1070創建)・法成寺(再建時、1058以降)・真言院(1178再建)・法勝寺(1077創建)・興福寺(再建Ⅱ期、1078以降)から出土したもの(73~77・88~90・92)と、同範瓦が尊勝寺(1102創建)等の寺院から出土したもの(67・68・72・84~86)があり、時期は11世紀後半と12世紀前半に分けられる。これらの瓦はいずれも浄光院所用瓦と推定でき、前者が創建期、後者が補修用と考えられる。

軒瓦の産地は、山城産28点、播磨産4点、丹波産13点、大和産4点、産地不明5点である。このように、全体では山城産が大半を占め他の産地は少ないが、11世紀後半のものでは丹波産が、12世紀前半のものでは山城産が大半を占める。

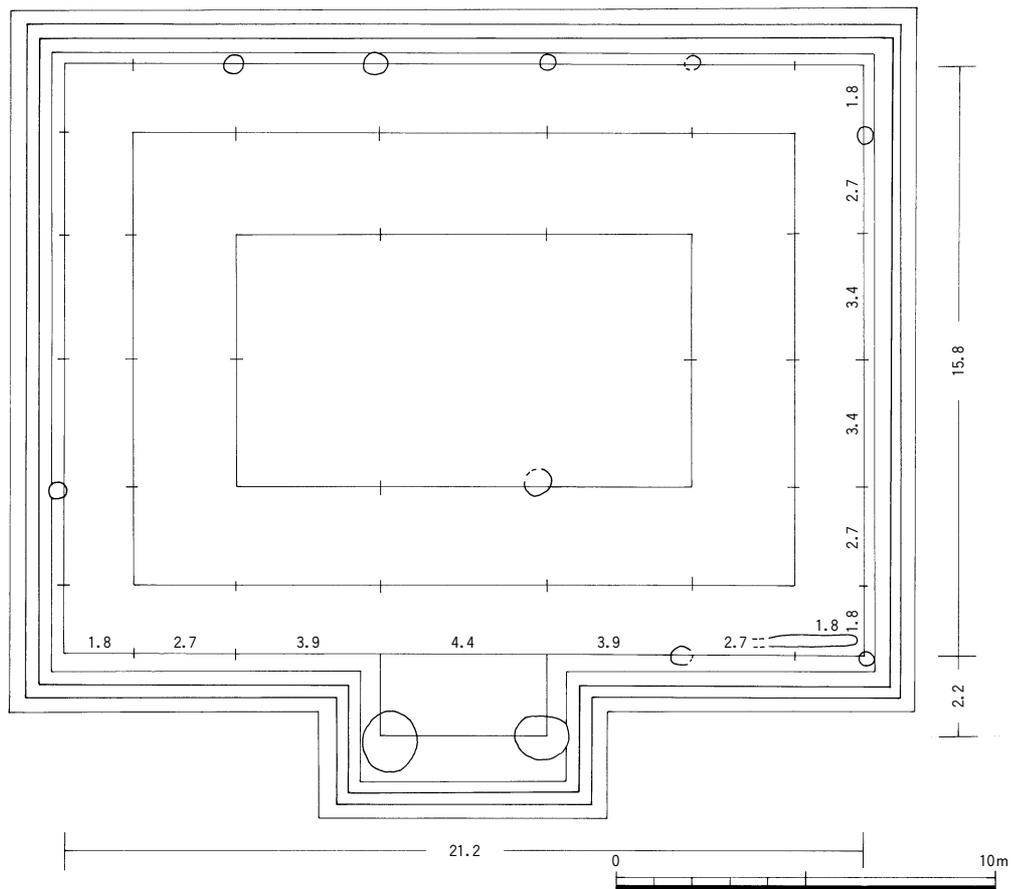


图17 1区建物1推定復原図（1：200）

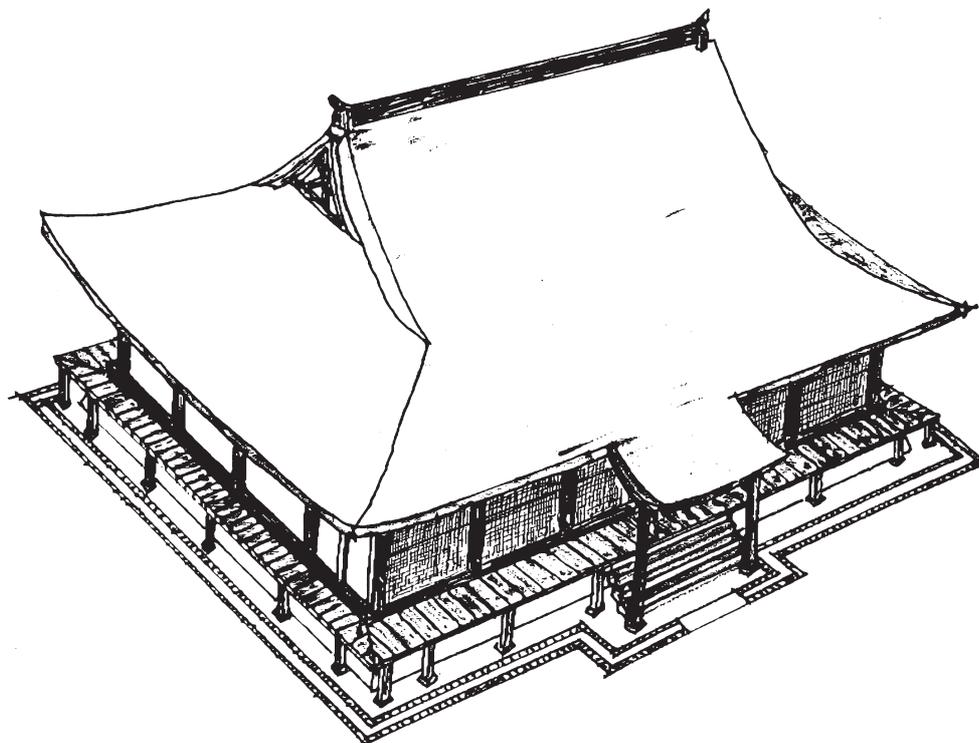


图18 建物1復原図（川上 貢作成）

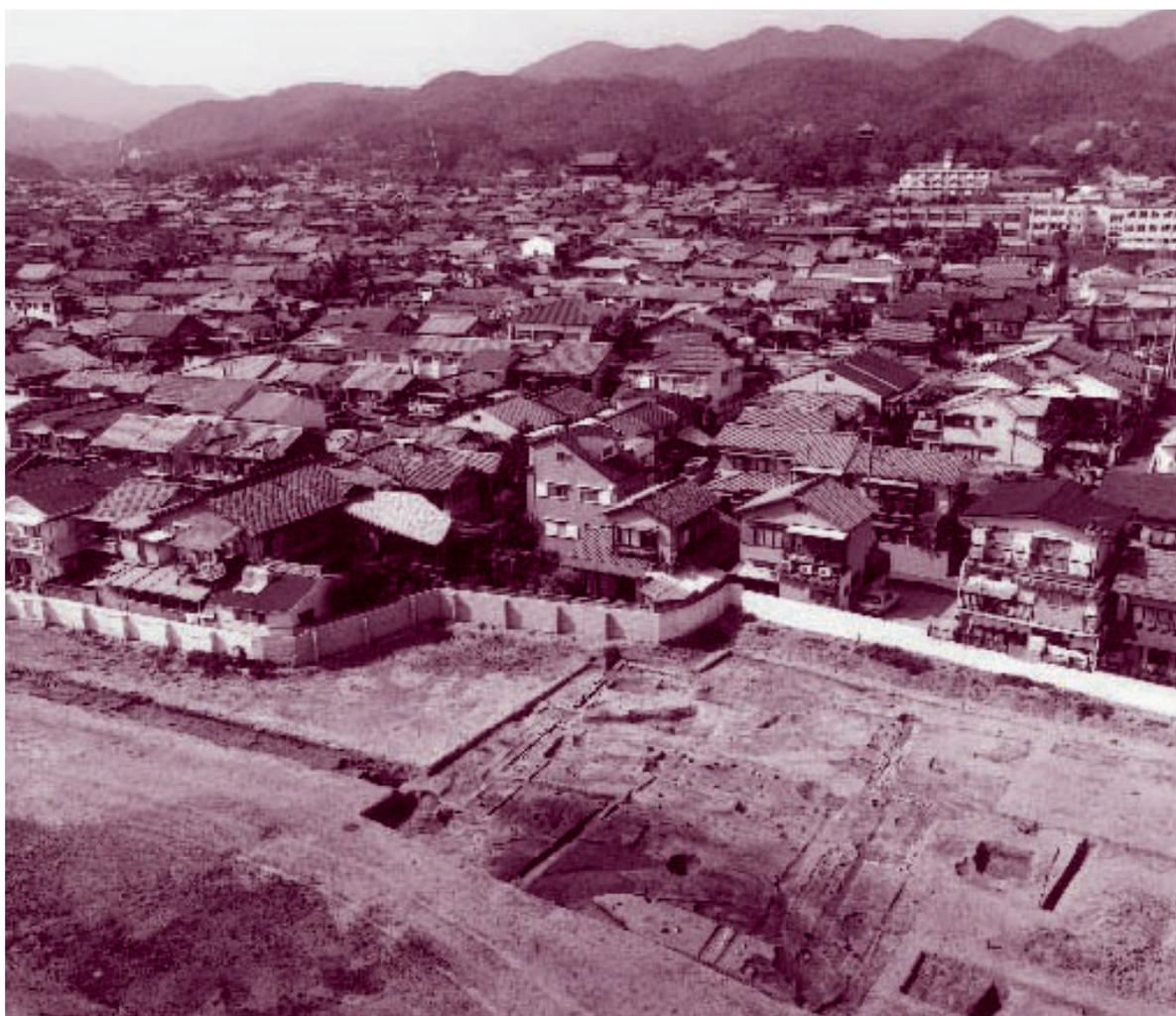
車輪 これまで組合せ式木製車輪は、輪木が平城京で5点(奈良時代から平安時代前期)出土しているが¹³⁾、いずれも破片で、今回初めて全体が分かる資料が得られた。

今回の資料は車輪外側の外輪(大輪)にあたり、内側の内輪(小輪)・輻・中心の円座は出土していない。復原すると、直径は105が1.48m、104が1.44mで、いずれも外輪7枚で構成される。車輪は輪木8枚・輻24枚の牛車用と、輪木7枚・輻21枚の雑車に分けられ¹⁴⁾、出土した2点は共に雑車に該当する。時期は伴出した土器から12世紀末と推定できる。出土状況は、井戸内から他の土器類と投棄された状況であり、外側面は使用のため片減りし、小石がめり込んでおり、井戸が埋没していく過程で、廃棄されたものと考えられる。

註

- 1) 加納敬二・小松山一良・平田泰他『京都嵯峨野の遺跡—広域立会調査による遺跡調査報告—』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 京都市埋蔵文化財研究所 1997年。
- 2) 1)に同じ。
- 3) 杉山信三「法金剛院発掘調査概報」『埋蔵文化財発掘調査概報 1969』京都府教育委員会 1969年。
- 4) 六勝寺研究会編『円教寺跡発掘調査概報』六勝寺研究会 1974年。
- 5) 畑美樹徳『円教寺跡発掘調査概報』六勝寺研究会 1977年。
- 6) 1)に同じ。
- 7) 平尾政幸「双ヶ岡中学校校内遺跡」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1988年。
- 8) 平田泰「円乗寺跡」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1991年。
- 9) 小松武彦・吉村正親「法金剛院境内」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1997年。小松武彦・吉村正親・小松山一良「平安京右京一条四坊・法金剛院境内」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1998年。
- 10) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 京都市埋蔵文化財研究所 1999年。
- 11) 杉山信三『院御所とその御堂—院家建築の研究』奈良国立文化財研究所学報第11冊 奈良国立文化財研究所 1962年。古藤真平「仁和寺の伽藍と諸院家(上・中)」『仁和寺研究』第1・2輯 古代学協会 1999年・2000年。
- 12) 百瀬正恒・木村捷三郎・杉山信三『仁和寺境内発掘調査報告書—御室会館建設に伴う調査—』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第9冊 京都市埋蔵文化財研究所 1990年。
- 13) 奈良国立文化財研究所編『木器集成 近畿古代編』奈良国立文化財研究所 1985年。
- 14) 古代学協会編『平安時代史辞典』古代学協会 1994年。

圖 版



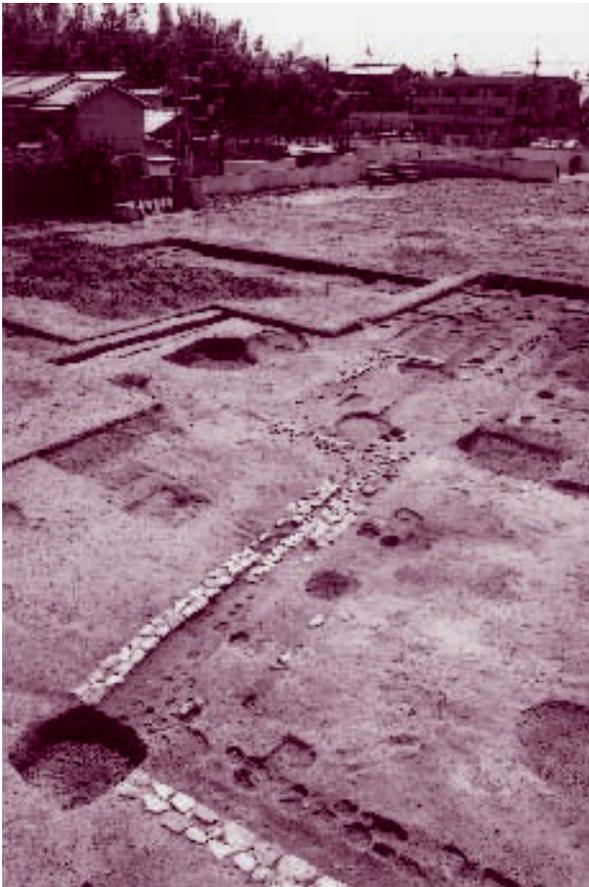
1 1区全景（南東から）



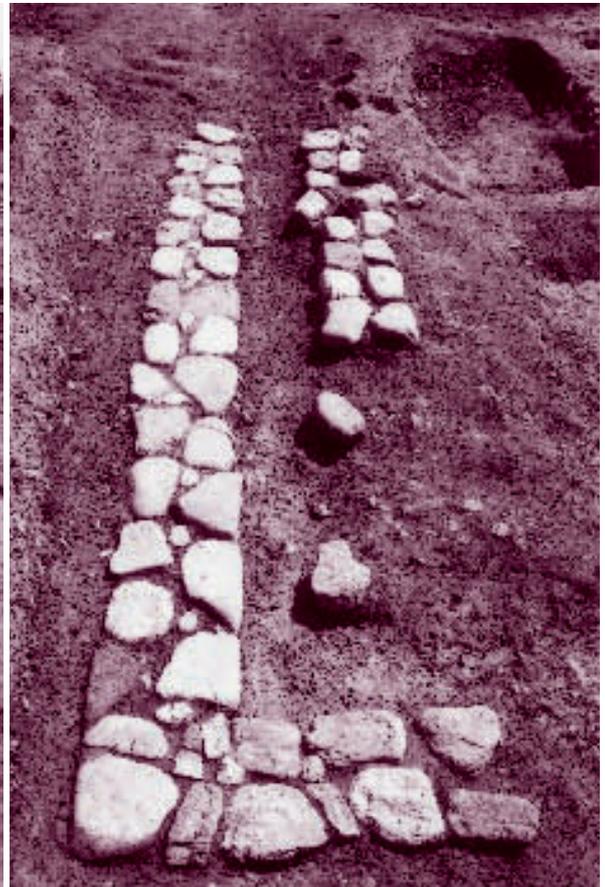
2 1区建物1全景（東から）



1 1区建物1向拝（北西から）



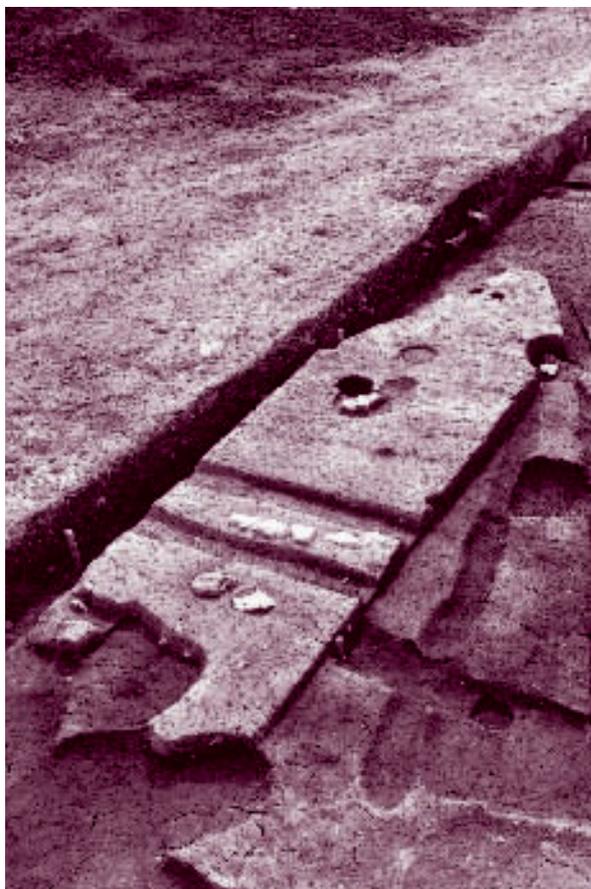
2 1区建物1雨落溝北東部（北西から）



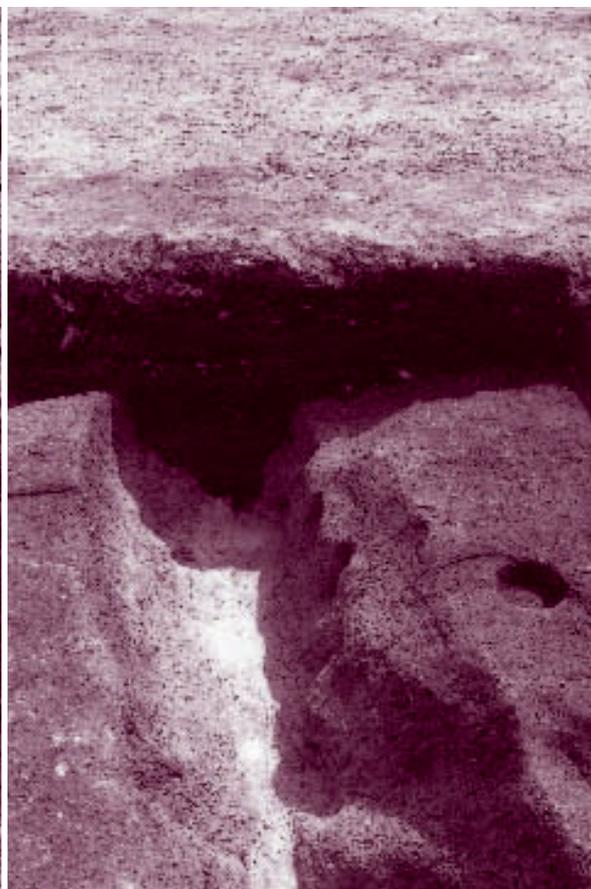
3 1区建物1雨落溝北西部（西から）



1 1区溝449 (北から)



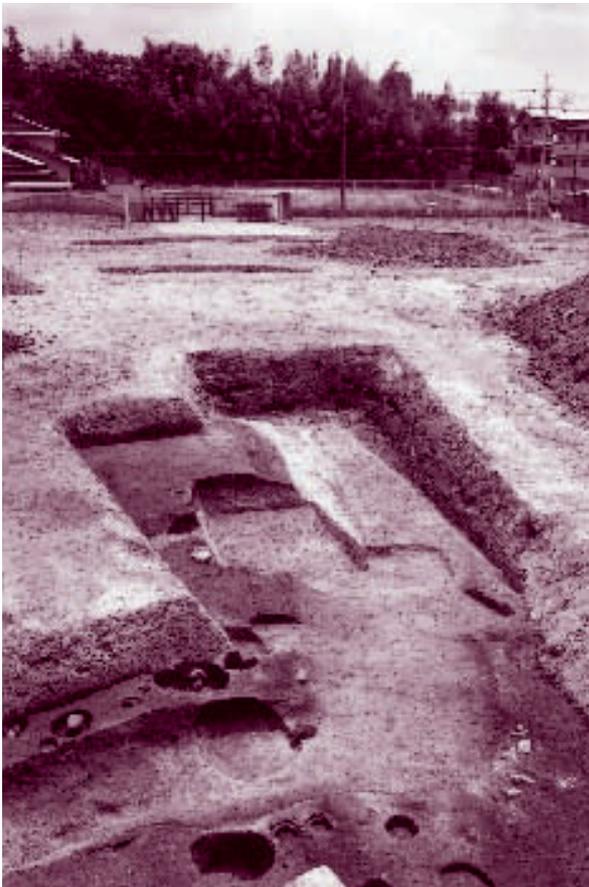
2 1区建物1南側整地状況 (北東から)



3 2区溝270 (北から)



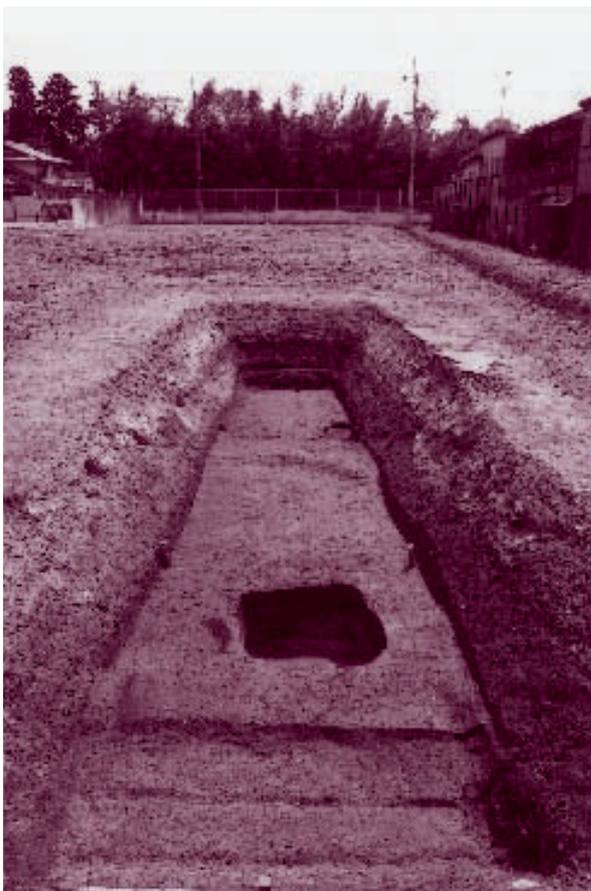
1 3区全景（北から）



2 3区溝443（北西から）



3 3区井戸293（北から）



1 5区全景（西から）



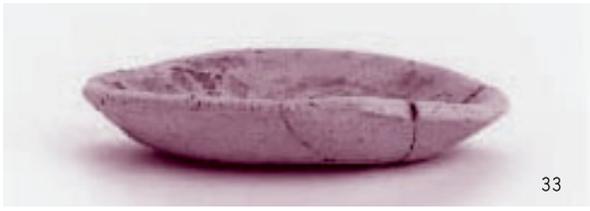
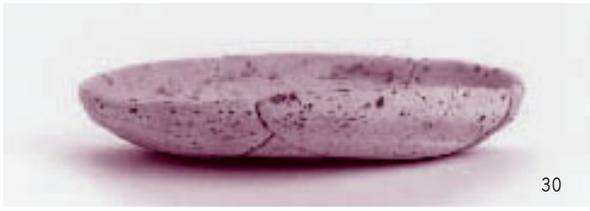
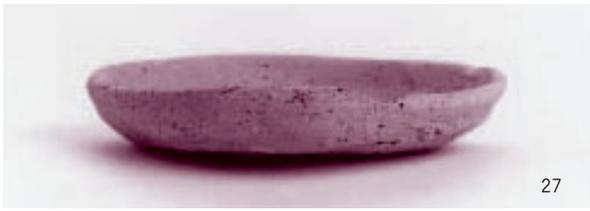
2 11区全景（北から）



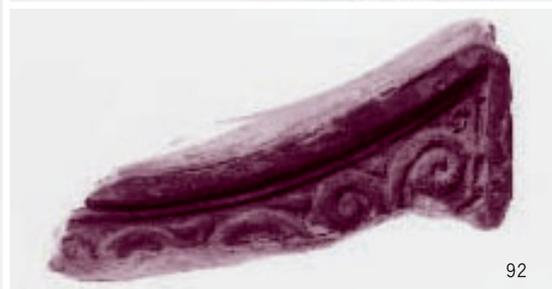
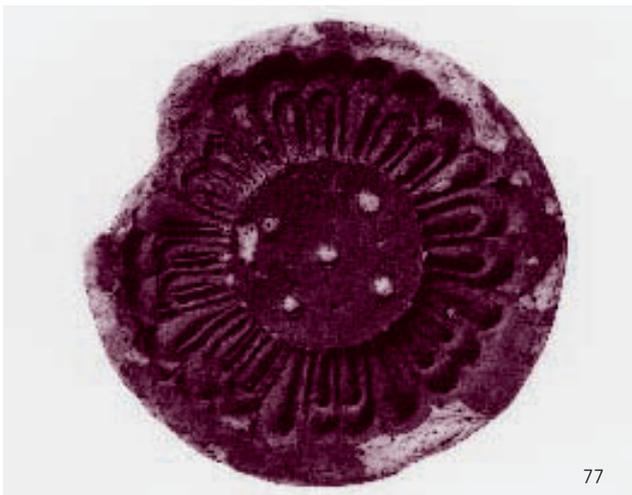
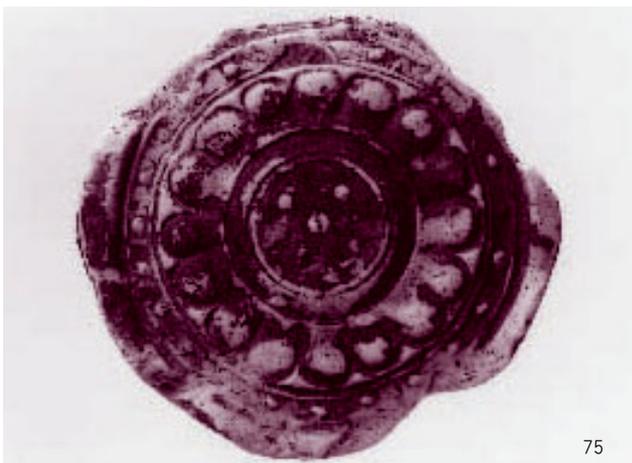
3 13区全景（北から）



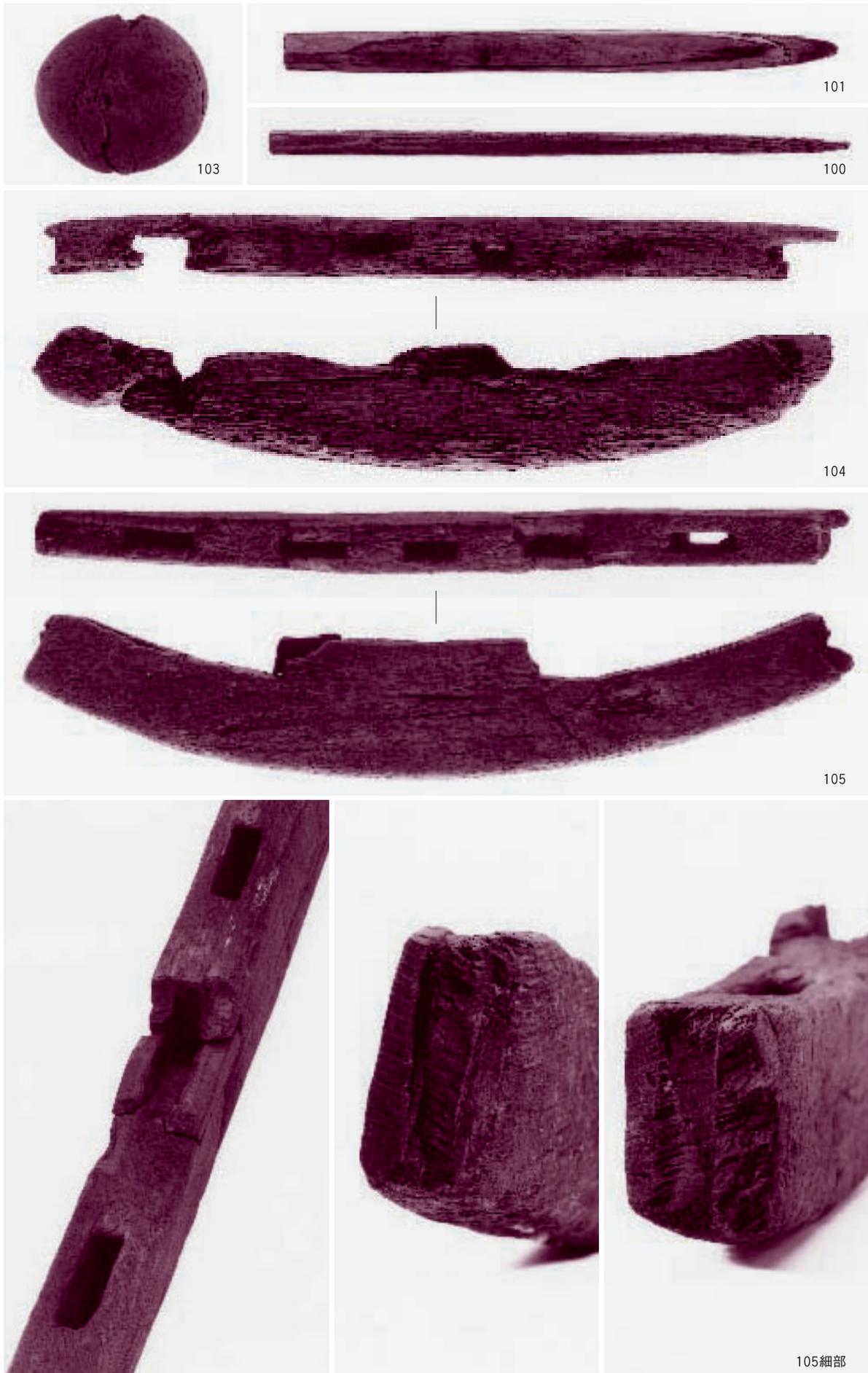
4 14区全景（南から）



1区溝449出土土器



出土軒瓦



出土木製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	にんなじいんけあと(はなぞのみやのがみちょういせき)							
書名	仁和寺院家跡(花園宮ノ上町遺跡)							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2001-1							
編著者名	上村和直・山本雅和・太田吉男							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	2002年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
仁和寺院家跡	京都市右京区 花園土堂町	26100		35°1′	135°43′	2001年2月 13日～2001 年5月21日	約1600m ²	団地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
仁和寺院家跡(花園宮ノ上町遺跡)	寺院跡	平安時代中期	無し	土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器、瓦類				
		平安時代後期から鎌倉時代	建物・柱穴・溝・井戸・土壇	土師器・須恵器・黒色土器・白色土器・瓦器・焼締陶器・灰釉系陶器・磁器、瓦類、木製品				
		室町時代以降	小溝・柱穴	土師器・陶器・磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-1
仁和寺院家跡(花園宮ノ上町遺跡)

発行日 2002年1月31日

編 集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発 行

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL(075)415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町298
〒604-0093 TEL(075)256-0961